
ハルケギニアに核ミサイルが落ちて来た

玩具の茶々々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルケギニアに核ミサイルが落ちて来た

【Nコード】

N8024T

【作者名】

玩具の茶々々

【あらすじ】

その日、トリスティン魔法学院では使い魔召喚の儀式が行われていた。落ちこぼれの少女ルイズが数多の失敗の末、ようやく『サムン・サーヴァント』に成功する。だが、それはハルケギニア壊滅の狼煙であった…。

召喚

その日、トリスティン魔法学院では使い魔召喚の儀式が行われていた。

広場の中央には、一人の少女が立っている。

まるで子ネズミのように小柄で平坦な体格、腰の辺りまで届く長いピンクブロンドの髪、そして強い意志を秘めた鳶色の大きな瞳。

少女の名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

ルイズは汗だくになりながら、必死に手に持った杖を振り続けている。

使い魔を呼び出す為に。

自身がメイジであり、貴族であるということを証明する為に彼女は杖を振り続ける。

しかし、彼女のそんな想いとは裏腹に、使い魔を召喚する魔法『サモン・サーヴァント』を唱えても、起こるのは小規模の爆発ばかり。

その不甲斐ない結果に他の生徒たちは、いつものように噓し立てた。

「いい加減にしろ、ゼロのルイズ!!!」

「爆発はもう見飽きたぞ!!!」

「出来ないなら止めちまえ!!!」

口々に飛んでくる罵声に、ルイズは悔しさを顔に滲ませる。
何か言い返してやろうと思ったが、既にその言葉のパターンも言
い尽くしている。

とどのつまり、彼女の失敗はそれだけの回数に及んでいるのだ。
既に他の生徒たちは皆召喚を終えている。

寧ろ、それだけの時間を浪費してもなお、未だに彼女に付き合っ
ているというだけ、彼らは真面目であると言えた。

全ては未だに成功出来ていないルイズのせいなのである。

(始祖ブリミルよ、お願い！どんな使い魔だっていい…私に『サモ
ン・サーヴァント』を成功させて！！)

祈るようにそう心の中で叫ぶと、再び意識を集中させる。

「宇宙のどこかにいる私の僕よ！ 神聖で美しく、そして強力な使
い魔よ！ 私は心より求め、訴えるわ！ 我が導きに…応えよ！」

ルイズはそう声を張り上げ、力いっぱい杖を振った。

しかし、何も起きなかった。

そう、何も。

爆発さえも。

ルイズが失敗すれば爆発が起きるのは周知の事実故に、この結果
は他の生徒たちにとっても意外なことであった。

この場の監督をしている教師のコルベールは、真つ先にルイズの精神力が尽きたのだと思い、彼女へと近寄った。

「ミス・ヴァリエール。今日はもういい。また後日行おう」

「でもコルベール先生。私、まだ…」

「爆発さえ起きなくなつた。君の精神力は尽きてしまったんだ。今日は休んで精神力を回復させた方がいい」

「でも…!!」

ルイズはそれ以上何かを言おうとしたが、言葉が続かなかつた。他の生徒たちもそろそろお開きかと一人、また一人と学院内へと戻って行く。

それは、コルベールも例外ではなく、ルイズの肩を慰めるかのように叩いた後、踵を返して学院内へと足を向け始めた。

ルイズの頭の中は最早お通夜のようなムードになっている。

そんな時、一人の生徒がふと空を見上げて呟いた。

「…何だあれ？」

高い空にポツンと一つ黒い点のようなものが見える。

それは徐々にだが、この場所に向かって落下して来ているようにも見えた。

ルイズは空を見上げ、「もしかして…!」とグツと拳に力を入れてコルベールを呼び止める。

「コルベール先生！もしかしてあの空に見えるのが私の使い魔かも知れませんか!!」

「…何だつて？」

コルベールもまるで子供のように首を上げて、空に見える黒い点を凝視する。

この高さでは流石に人間の視力で目視することは不可能である。だが、確実なのは、それがこの場所へ落ちて来ているということであった。

「…この感じであれば、この場へ着地するのにそう時間は掛からないか。分かりました。あの落下物の正体を見て、それが貴女の使い魔であるかどうか確認しましょう」

「あ、有難うございます！！」

ルイズは思い切り頭を下げた。

落下物の正体は分からない。

だが、ルイズにはそれが自分の使い魔であるという根拠の無い確信があった。

学院内へ戻ろうとしていた生徒たちも、ルイズの使い魔を一目見ようと再び広場に集まる。

その中には彼女のライバルであるキュルケやその友人のタバサもいた。

(フフン。ルイズ、アンタの使い魔がどんなものなのか、この目で見極めてあげようじゃないの)

褐色の豊かな肢体を自ら抱え、落下物の行く末を見守る。

タバサも一冊の本を読みながら、友人に付き添っていた。

そして、それから数分後、ついにその落下物は地面へ着地する。

その瞬間、閃光とともにハルケギニアからトリステイン魔法学院とその一帯の地域は消滅した。

病

トリスティン魔法学院の消滅。

その報せが王宮へ届くのに時間は掛からなかった。

生存者ゼロ。

その現実だけがマザリーニ並びにマリアンヌ王妃、アンリエッタ王女へと報告される。

親友の死にアンリエッタ王女は一目も憚らず号泣し、慟哭する。
そんな王女を慰めつつ、マザリーニはこの事態に眉間の皺を寄せ
る。

(…一体何が起きたというのだ?)

被害のあった地域付近の住民へ聞き込みをすると、トリスティン魔法学院のあった方角が急に光りだした。
という目撃情報を得る。

光。

存在の消滅。

マザリーニはそこに魔法の存在を疑った。

しかし、ハルケギニアの魔法にそこまでの力を持ったものはマザリーニの知る限りでは存在しない。

あのカリーヌですら、一瞬で何もかも消滅させるような真似は出来
ないであろう。

(…もしや、虚無?)

伝説に名を残す、虚無の魔法。

それであれば、或いはこの事態を引き起こせるのかも知れない。

しかし、あの場所には抉れた地面を除いて、もう何も存在しない。その虚無の魔法の使い手がいたとしても、生きていることは絶望的だろう。

もし仮にその使い手が生きていて、何らかの悪意を以ってトリステイン魔法学院を滅ぼしたのであれば早急に対策を練らなければならぬが、そんなあるかどうかも分からないことを考えるよりも先にすべきことがあるとマザリーニは判断する。

(…アンリエッタ王女には気の毒ではあるが、最早起こってしまったことはどうしようもない。問題なのはこれから先のことだ。すぐにあの場を調査し、少しでも事態の全貌を知らなければならぬ。あのようなことがもう一度、しかもこの王宮で起きれば我が国は…いや、ハルケギニアはお終いだ！)

そのマザリーニの懸念が間違っていないことは、皮肉にも彼らの命を以って証明されることになる。

トリステイン魔法学院消滅から数日後。

調査へ向かった兵士たちが次々と体調不良を訴え、倒れ始める。彼らを医者や水メイジに見せても一向に体調は回復せず、ついにはその中の一人が血反吐を吐いて死んでしまった。

王宮の人間はマザリーニも含めて毒や伝染病を疑い、該当する兵士たちを隔離する。

そして、何人かをアカデミーへ提供した後に残った兵士たちを全員殺し、王宮から離れた場所へ捨てるように命じた。

(…すまぬな。誰かに感染しては遅いのだ)

死んでいった兵士たちに黙祷を捧げ、アカデミーのいち早い解析に希望を繋げる。

しかし、当のアカデミーもこの原因不明の病にはお手上げであり、分かったことはこの病に掛かったら死ぬしかないということ。という最早絶望的な答えだけであった。

(…我々は未知の敵に無力なのか)

マザリーニは落胆し、そして決断する。

(…あの場を封鎖し、誰も踏み入れないようにするしかない。無力な我々にはそれしか打つ手は無いだろう)

その後、トリステイン魔法学院跡地は調査半ばで封鎖され、決して誰も入れぬように隔離されたが、何処からかこの話を聞きつけた者や他国からの密偵がそこへ入り込む事件が多発。

だが、彼らはそのまま例外なく全員死んでしまった為、この地は世界各国から『死の大地』と呼ばれるようになった。

やがて、誰も足を踏み入れることが無くなり、完全に『死の大地』と化するのもう暫く先のことである。

それから数日間はまるで、先の事件が嘘のように何も起きなかった。

人々は恐怖におののきながらも、何とか日常をこなしていくことに精一杯努めていた。

更に数日後。

空に再び黒い点が一つ現れた。

それはトリステイン王国の調度真上であった。

だが、それを知る者は誰もいない。

落下物は正確にトリステイン王国へと落ちて行く。

蔓延

一カ月後。

そのわずかな間にトリスティン、ロマリアといった大国がハルケギニアの世界地図より消え去った。

大国消滅の寸前には周囲にとても強い光を発していたことから、その光は『破壊の光』として恐れられていた。

レコンキスタへ出向いていたことで危うく消滅から逃れていたワルドはこの事態に舌を巻いていた。

(…最早聖地奪還などと言っている場合ではない。次にあの光を目にするのは我々なのかも知れない)

レコンキスタの盟主、オリバー・クロムウエルは酷く狼狽し、最早使い物にならない。

このレコンキスタもいずれはバラバラになってしまふことだろう。アルビオン奪回など、既にどうでもよくなっていた。

(この機に攻め入ろうという気概さえ無いとは…オリバー・クロムウエル。このジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。あなたを見限らせて頂きます)

とは言え、何処へいても無事に済むとは到底思えない。

まさかロマリアほどの大国があんなにあっさりと壊滅するとはワルドも思っではいなかったのだ。

その悪魔の如き光の威力は凄まじく、その上周辺一帯を毒で覆い、生き物は勿論のこと植物さえもそこに存在することを許さなかった。

ロマリアの跡地には、誰もまだ足を踏み入れていない。
だが、恐らく生存者は存在しないであろう。

(…行くべき場所と言えば、やはりガリアか。しかし、曲がりなりにもトリステインの騎士である自分がガリアへ行って、怪しまれはしないだろうか?)

トリステインは王宮だけでなく、城下町であるトリスタニアさえも消滅し、生存者はゼロと報告されている。

だが、その王宮に仕えていて、使えるべき主と共に消滅した筈の騎士が一人でのこのことやって来て、何か後ろ暗いものがあるのではないかと疑われはしないだろうかとワルドは心配する。

ガリア王国の国王、ジョゼフ1世は変わり者、無能と呼ばれているが、その実切れ者であることをワルドは見抜いていた。

そのジョゼフ1世が、自分をただの生き残りと思わないであろうということは想像するに難くない。

仮に自身を受け入れたにせよ、その言葉を額面通りには受け取れないと思っている。

(しかし、どちらにせよ道はない。最早ガリアしか…)

ワルドはレコンキスタを離脱し、ガリア方面へと足を進めた。

一方。

ガリア王国では、ジョゼフ1世が二つの大国の消滅を苦々しい顔で振り返る。

(トリスティンにロマリア…二つの国がいとも容易く…クツ！)

自身が望むのは世界の破壊。

最愛の弟を殺し、その家族にまで手をかけ、それでも泣くことが出来なかった自分が人並みに泣けるようにする為の最後の手段。

だが、この度の事件は、自分の思惑から完全に外れていると感じていた。

自らの手で行っていないというのもあるが、何よりも呆気なさ過ぎる。

疲弊しきり、最早伝統だけしか残っていないトリスティンはともかく、ロマリアはガリアが本気で挑んでも勝てると言い切ることが難しい国である。

そんな国が一瞬で消え去ってしまったのだ。
こんな馬鹿馬鹿しいことがあるだろうか？

自分は確かに世界の破壊を望んだ。

だが、それは自らの手で、ゆっくりと壊れていく様をこの目で見ることで初めて完成する。

壊れていく様すら見ることが出来ず、気付いた次の瞬間には何も残っていない。

これで、どう泣けと言うのか。

(世界は…いや、神は俺から泣くことさえ奪おうというのか…)

ジョゼフ一世はその青い髪を掻き毟り、言い知れぬ苛立ちを表現する。

と、彼の元へ一人のエルフの男が寄って来る。

「王…一体どうなされたので？」

「ヴィダーシャルか：お前たちの国は大丈夫なのか？」

「…今のところは」

「そうか…この国もいつトリステインやロマリアと同じようになるか分からぬな」

「…その時はどうされますの？」

「…抗うさ。俺はこんな何も残らぬ死など迎えたくは無い」

ジョゼフィー世は力強くそう言うと、シェフィールドを呼び寄せる。そして、ミヨズニトニルンの力を以って、事態の対策を講じるように命じた。

それから数日後、とある噂話がガリア王国の首都リュティスで囁かれた。

「…知っているか？ロバ・アル・カリイエが例の『破壊の光』で消滅しちまつたらしいぜ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8024t/>

ハルケギニアに核ミサイルが落ちて来た

2011年6月6日05時33分発行